

ライバル同僚の
甘くふしだらな溺愛

結祈みのり

Minori Yuuki



Eternity
BUNKO

目次

ライバル同僚の甘くふしだらな溺愛

5

書き下ろし番外編

閉じ込めたいほど愛してる

339

ライバル同僚の甘くふしだらな溺愛

プロローグ

「別れよう。他に好きな人ができたんだ」

桜の蕾が膨らみ始めた麗らかな春の日。

卒業式を終えたばかりの高校の裏庭で、三雲瑠衣は恋人の川瀬に突然の別れを告げられた。あまりに突然の出来事に頭が回らない瑠衣に、川瀬は流れるように言った。

もう随分と前から瑠衣には飽きていて、ここ数ヶ月は情性で付き合っていたこと。

そんな時に年上のOLと出会い、親密な関係になったこと。

「それでも気を遣ったんだぜ？ 受験前に振って、お前が落ちたら可哀想だから今日まで待ったんだ。でも、無事合格したしもういいいな。今だから言うけど、お前の澄ました態度にはうんざりしてた。お高くとまって、いつも見下されるような気がしてた。どうせ俺と付き合ったのだからって気まぐれで、そんなに好きだったわけじゃないだろ？」

「ちがつ、そんなこと——」

「確かにお前は完璧だよ。美人で、頭もよくて、運動もできる。学校一モテる女を彼女

にできて、俺も嬉しかった。でもそんなの初めだけだ。全然甘えてこないし、可愛げがないんだよ」

「っ……………！」

「大学も違うし、この先会うこともないだろ。じゃあな、それなりに楽しかったよ」

最後にそう言い残して、川瀬はその場に立ち尽くす瑠衣を置いて去っていった。

その後のことはほとんど覚えていない。

気づけば瑠衣の足は図書室に向かっていた。

読書が趣味の瑠衣にとって、図書室は教室以上に落ち着く場所だ。少しカビ臭くて湿ったような独特の匂い。本のページをめくる音やカリカリとペンを走らせる音。それらは不思議と心地よくて、暇さえあれば図書室を訪れていた。

卒業式の日の図書室は、当然のようにしんと静まり返っていた。開け放たれた窓から吹き込む風でカーテンがゆらゆらと揺れている。それに吸い寄せられるように、瑠衣は窓辺へと足を向けた。図書室からは裏庭が見える。もちろん、先ほど瑠衣が振られたばかりの桜の木も。

(私、振られたんだ)

付き合ってから二年。瑠衣の青春は、常に川瀬と共にあった。だからこそ、川瀬の主張はあまりに突然で、一方的で、瑠衣はなんの反応もできなかった。しかし、こうして一人

になってようやく実感する。瑠衣は、川瀬の気持ちが自分から離れていたことに全く気づいていなかった。

内部進学する川瀬と違い、外部進学の瑠衣は三年生になって受験勉強が忙しくなった。必然的に川瀬と過ごす時間は減っていたが、時々デートをしていたし、変わらず上手くいっていると思っていた。でも、それは瑠衣だけだったらしい。

瑠衣が受験勉強に励んでいる間、川瀬は他の女と関係を深めていた。

「……馬鹿みたい」

澄ましてるとか、見下してるとか、そんなことなかったのに。

瑠衣は甘えていたつもりでも、川瀬はそんな風には思っていなかったのだ。

目頭が熱い。気づけば瑠衣は泣いていた。

自分が怒っているのか、悲しんでいるのかもわからないのに、涙は止めどなく溢れて頬を濡らしていく。喉から声にならない嗚咽が漏れて息苦しい。

何も知らなかった。気づかなかった。そんな自分が愚かしくて、情けない。

「三雲さん？」

感情のまま涙を流していた瑠衣は、はっと振り返る。

「山田……？」

ドアの前に立っていたのは、図書委員の山田だった。

もじやもじやの癖のある黒髪をした猫背の彼は、戸惑いながらもゆっくりと瑠衣の方に近づいてくる。分厚い眼鏡をかけた目元は、長い前髪に隠れてほとんど見えない。しかし、その視線が泣いている自分に向けられているのは明らかで、瑠衣はさっと視線を逸らした。

「なんで、ここに」

「最後に司書の先生に挨拶をしようと思って……」

「……先生ならいないよ。職員室に行ってみたら？」

言外に一人にしてほしいと伝えるが、山田が動く気配はない。

「何？」

「泣いてる三雲さんを放っておくなんてできないよ」

「つ……山田には関係ないでしょ？」

嫌な言い方をしている自覚はあった。瑠衣の失恋と山田はなんの関係もないのに、ただ居合わせただけで「どこかに行け」なんて最低だと思う。

それがわかっているけど、感情を抑えることができない。だからこそ山田には早く立ち去ってほしかった。彼は、瑠衣にとって唯一の男友達だったから。

一部の生徒から「ヲタク」「キモ眼鏡」「ガリ勉野郎」と酷いあだ名をつけられていたのは知っていたが、山田はとても読書家で、しかも瑠衣と本の好みが似ていた。

クラスも違うし共通の友人もいない。自己紹介の時に苗字しか教えてくれなかったから、いまだに下の名前も知らない。それでも、本について語る時の彼は、普段とは別人のように饒舌になるのを知っていた。

いつからか、瑠衣と山田は放課後に顔を合わせて本の貸し借りをする仲になっていた。学校では何かと目立つ自分に対して、なんの興味も示さない山田の存在は新鮮で、そんな彼と過ごす時間は不思議と嫌いじゃなかった。

「……嫌な言い方をしてごめんね」
顔を逸らしたまま瑠衣は謝罪する。

「私、振られたの。ずっとうんざりしてたんだって。見下してるとか、お高くとまってるとか……そんなつもり、全然なかったのに」

「三雲さん……」
「……何がいけなかったのかな」

考えても答えはわからない。急にこんなことを聞かされた山田も困るに決まっている。「……ごめん、最後のなにに変なこと言っちゃって」

「最後じゃない。最後になんてしたくない」
はつきりとした声にはつと顔を上げて——驚いた。いつもは俯うつむいて小さな声で話す彼が、初めて瑠衣を正面から見ているのだ。

「山田？」

「三雲さん、僕と付き合おう」

「え……？」

「僕と、付き合ってほしい」

——聞き間違いではなかった。

それを理解した瞬間、真っ先に感じたのは戸惑いだった。

「……何言ってるの？ 付き合うって、私たちは友達でしょ？」

山田なりに慰めてくれようとしているのだろうか。だがその考えはすぐに否定される。「慰めたくて言ってるんじゃない。それに僕は、三雲さんを友達だと思ったことは一度もない」

友達ではない。明確な否定に、ひゅつと喉の奥が鳴る。

「好きなんだ。初めて会った時からずっと、君のことが好きだった」

瑠衣はそれに反応できなかった。

（知らない）

こんな風に瑠衣を熱っぽく見つめて、感情を露あわにする山田なんて知らない。力強い声色も、凛りんと伸びた背筋も、全てが別人のようだった。何よりも、友達ではないと否定されたことが苦しくて、辛かった。

「やめて！」

感情のままに瑠衣は叫ぶ。直後にはと我に返ったが、遅かった。

山田が唇をきゅっと引き結んでいる。その姿からは彼が傷ついたのが十分伝わってきた。

(私、最低だ)

言い表しようのない罪悪感が襲ってきて、瑠衣はその場から逃げ出した。

「三雲さん！」

すぐに後ろから呼び止める声があったけれど、足を止めない。図書室を出た瑠衣は階段を駆け下り、校舎を後にした。そのまま真っすぐ家に帰って、自室の扉を閉めるなりベッドに突っ伏して声を殺して泣いた。

「ごめ……ごめんなさい……」

最後に見た山田の傷ついた顔が頭から離れない。

十八歳の春。

瑠衣は彼氏と友人を一度に失ったのだった。

1

都内の夜景を一望できる某ラグジュアリーホテル。

そのレストランの一角で、一組の男女が向かい合っていた。

一目で質のよさがわかるスーツを着た男の手の中で、ダイヤモンドのリングが眩いばかりの煌めきを放っている。まるでドラマのワンシーンを切り取ったようなこの状況で、男から発せられる次の言葉は容易に想像できた。

もしもここにいるのが恋人同士なら、女は期待で胸を高鳴らせて男の言葉を待つのだろうか。

でも、瑠衣は違った。

(お願いだから、その指輪をしまつて……！)

なぜなら瑠衣と目の前の男は恋人ではない。仕事の付き合いで何度か顔を合わせただけで、友人ですらないのだから。

瑠衣は現在、株式会社日本マイアフーズ東京支社営業部に所属している。

アメリカに本社を置くマイアフーズは、創業百年を超える世界的食品メーカーで、食料品や飲料品、菓子などの製造販売を行っている。現在入社七年目の瑠衣の業務は営業で、取引先であるスーパーやドラッグストア、コンビニや百貨店に自社製品を売り込むのが主な仕事である。

具体的な業務としては、取引先のバイヤーと商談を行ったり、仕入れ後の商品の販売の企画や提案などがあるが、目の前の男と出会ったのもそんな時だった。

取引先の役員かつ跡取り息子である男は、仕事で訪問していた瑠衣を偶然見かけたらしい。

自分の何を気に入ったのか、会社を来訪するたびに顔を見せては食事に誘ってきた。瑠衣は丁重に断り続けていたのだが、面倒なことにとどこからそれが上司の耳に入ってしまった。

『別に食事くらいいいじゃないか。接待だと思えばいいし、これも仕事のうちだ』
上司は、そう苦言を呈してきたのだ。

勝手なことを言う上司に苛立ちましたものの、一度食事に行って相手の気が済むのならその方がいいかもしれないと考え直した。だから、瑠衣は上司も同席することを条件に食事を了承したのだが、いざレストランを訪れてみると、待っていたのは男だけだったのだ。

はめられたと気づいた時には後の祭り。しがたないOLの自分が、取引先の御曹司を一人残して帰る選択肢はありえなかった。故に瑠衣は、丁重に相手をしてつつがなく食事を終えようと考えていたのだけれど――

「三雲瑠衣さん！」

「は、はい！」

それは、叶わない願いだったらしい。

「初めて会った瞬間からあなたに惹かれていました。俺と一緒になってくれば、一生生活には苦労させません。もちろん仕事は辞めていい。だから、俺と結婚を前提に付き合ってください！」

男は瞳を輝かせて笑顔で言い切った。指輪に負けないくらいのキラキラスマイルからは、イエス以外の言葉はありえないと思っているのがひしひしと伝わってくる。

そんな相手を前に言えるわけがなかった。

私たちは知り合ってまだ二ヶ月ですよ、とか。

付き合う前に指輪って、それはもうプロポーズですよ、とか。

なぜ仕事を辞める前提になつていいのか、とか。

言いたいことはたくさんあるが、正直に伝える勇氣は瑠衣にはない。

男の会社と瑠衣の会社の付き合いは深く、今後とも関わっていくことがわかっている。だから瑠衣は、山のような突っ込みを腹の中にしまい男と向き合った。

「ごめんなさい。あなたとお付き合いすることはできません。――山田さん」
謝罪しながらも頭をよぎったのは、かつて自分が振った男のことだった。



「——それで、振られて泣き出した御曹司を必死に慰めたのか？ 振ったお前が？」
「……そうよ」

会社のラウンジで休憩を取っていた瑠衣は、ため息混じりに頷く。すると、隣で缶コーヒー片手に立っていた男はぶはつと噴き出し、堪えきれないように肩を震わせ始めた。

「笑いごとじゃないんだけど」

横目でじろりと睨むと、男は「いや、だって」と笑いを噛み殺す。

「笑うなどか無理だろ。想像しただけで面白すぎる」

目尻に涙を浮かべて笑う男の名前は、同僚の神宮寺竜樹。

瑠衣と同じ東京支社営業部に所属する彼は、「ああ可笑しい」と引き攣った声で小さく呟く。

「その後は、秘書に山田さんを引き渡して一人で帰宅した、と」

「……だからそうだってば。本当に大変だったのよ。山田さんを迎えに来た秘書の方には白い目で見られるし、今回のことが原因で山田商事の担当も外されるし」

「しかもその後任者が俺だもんな」

「そうよ。それが一番面白くないの」

よく言えばライバル、悪く言えば目の上のたんこぶ。瑠衣にとって神宮寺はそんな存在だった。

年齢こそ瑠衣と同じだが、その経歴はまるで違う。瑠衣は、都内の大学を卒業後、新卒で日本マイアフーズに入社して以来、今日までずっと東京支社営業部に所属している。

対する神宮寺はアメリカの大学を卒業後、そのまま現地採用で本社に入社。その後、素晴らしい営業成績を連発し、何度も社長賞を受賞するなど目覚ましい活躍してきた。

そんな彼は、二年前に本社から東京支社営業部に異動してくるなり、あつという間にトップの営業成績を叩き出した。

ちなみにそれまで東京支社でトップをひた走っていたのは瑠衣である。しかし、今は「営業部のエースは神宮寺」というのが部内の共通認識で、瑠衣はずっと二番手か三番手に甘んじていた。

それでも、「いつか神宮寺を超えてやる！」の一心で仕事に励んでいたのに、今回、大口取引先である山田商事の担当者を彼に譲ることになってしまったのだ。

そんなの落ち込むという方が無理な話だ。

「ま、そのうちいいことあるさ」

中身がなさすぎる慰めの言葉に、瑠衣はじろりと神宮寺を睨む。

「山田商事と取引するために、私がどれだけ必死に営業をかけてきたかは知ってるでしょ。神宮寺が担当になった途端に売り上げ激減、なんてことになったら許さないから」「むしろ三雲が担当してた時より売り上げを増やしてやるから、楽しみに待つとけよ。数字を見て悔しがるお前を見るのが今から楽しみだわ」

「言ったわね？ 大口を叩いて売り上げが下がったら笑うから」
わかりやすい挑発にあえて乗っかる。だが、神宮寺は余裕綽々な様子でふんと鼻で笑った。

「そんなことにはならないから安心しろ。でも、どうして山田さんを振ったんだ？ 山田商事の次期社長夫人なんて、なりたいたいと思ってもなれるもんじゃない。その立場を狙ってる女なんて山のようにいるだろうに」

関東を中心にドラッグストアを展開する山田商事は、国内でも名の知れた大手企業だ。その御曹司の求婚を断るなんて、と当然といえば当然の質問をされた瑠衣は、うんざりして顔をしかめた。

「部長と同じことを言うのね」

瑠衣と山田商事の御曹司を二人きりにするよう仕組んだ部長は、それを謝罪するどころか交際を断った瑠衣を遠回しに責めてきた。

「取引を打ち切られなくてよかった』『せつかくの玉の輿こしだったのにもったいない』っ

て、ネチネチネチネチ。だいたい、仕事を辞める前提で話す人と結婚なんてしないわ」

瑠衣は今の仕事が好きだ。もちろん楽しいことばかりではないし、時に苦しいことや辛いこともある。それでも、売り上げという目に見える形で成果がわかるのは楽しいし、自分の考えた販売企画が実現して売り場に反映されるのを見るのは素直に嬉しい。

加えて営業職の給与には、基本給の他に営業成績手当が付与される。

トップをひた走る神宮寺には及ばないものの、瑠衣の年収は同年代女子の平均より高い。

自分の好きな仕事をして、生活するのに十分な収入も得られる。それらを捨てて顔見知り程度の男——しかも「山田」だ——と結婚するなんて選択肢は、瑠衣にはなかった。「玉の輿には乗りたい人が乗ればいい。でも私は興味ないわ。社長夫人にならなくても、自分で食べる分かけくらいは自分で稼かせぐもの」

可愛げの欠片かけもない自覚は十分あったが、神宮寺も瑠衣にそんなものは期待してないだろう。

そう思っていたのに、彼の反応は違った。彼は、まるで眩まぶしい存在を見つめるような眼差しを瑠衣に向けてきたのだ。

「いいな。お前のそういうとこ、すげー好き。惚れるわ」

「は……？」

好き。惚れる。その言葉にドキツとしたのは一瞬だった。

「男らしくてかつこいい」

即座にオチをつける男に、瑠衣は深いため息をつく。

「突っ込むのも面倒だけど一応言っておくわ。私、女だから。あと、神宮寺に惚れられても全然嬉しくない」

「馬鹿だな。俺がかなりモテるのを知らないのか？」

「自惚れもほどほどにね」

「見る目がないな、事実だつての」

ああ言えばこう言う。本当に口の減らない男だ。しかし、悔しいことに神宮寺の言葉は本当だった。

百八十センチを超える長身。きりりとした眉毛と切れ長の涼やかな目。

すっと通った鼻筋に形のよい唇。それらは完璧な配置をしていて、「イケメン」「美形」という言葉はこの男のためにあるのではと思うほど整っている。

長年海外で暮らしていたため英語はネイティブレベルだし、さりげなくレディーファーストだったりする。エレベーターでは扉を押さえて女性を先に乗せたり、女性の重い荷物を持ってあげたりといったことを、とてもスマートに行う。

その上、人当たりが抜群にいい。基本的には笑顔で時々冗談を言いつつも、決める時にはきちんと決めるのだ。顔がよくて、仕事もできて、その上人もよくて面白い。当然モテないはずがなく、神宮寺が社内でも最も人気のある男なのは間違いない。

女性関係もかなり華やからしく、噂では「来る者拒まず去る者追わず」「彼女は取っ替え引っ替え」と聞いたことがある。つい先日も秘書課の女性と別れて取引先の社長令嬢に乗り換えた、なんて話を聞いたばかりだ。その真偽のほどは定かではないが、神宮寺は女性社員はもちろん、男性社員からの人気も高いのは周知の事実である。

そんな男をライバル視している女なんて、社内中探しても瑠衣くらいものだろう。女性から黄色い声を浴びるのが常の神宮寺にとっても、瑠衣の存在は面白いのか、何かと瑠衣に突っかかってはその反応を見て楽しんでる節がある。今だって、山田商事の担当を外されたショックでラウンジにいた瑠衣をわざわざ探しに来たのだ。

(ほんと、腹が立つ)
それなのに嫌いになれないのは、彼が嫌味なだけの男ではないと知っているからだろう。

「とにかく、山田商事については心配するな。これまでのお前の努力を無駄にはしないよ」
意地悪くからかっってきたかと思えば、こうして欲しかった言葉をくれる。
そんな男だからこそ、瑠衣は負けたくないと思うのだ。

「……そうなることを祈ってるわ」

「あっ！ 神宮寺さん、こんなところにいたんですね！」

その時、ラウンジに甲高い声が響き渡る。談笑していた二人のもとにやってきたのは、同じ営業部に所属する営業事務職の原田理保だ。二十四歳の彼女は、瑠衣より頭一つ分は背が低い。小柄な体やくりくりのぱっちりした瞳は「可愛い」の一言に尽きる。

柔らかな白いシフォンシャツと明るい茶色のスカートを身に着けた彼女は、きつ顔立ちの瑠衣とは正反対の、守ってあげたくなくなるような雰囲気を持っていた。

「探しましたよお」

原田は甘えるような声で神宮寺に話しかける。

「原田さん、どうかしたの？」

「先ほど神宮寺さん宛にお電話がありました。山田商事の担当者さんからで、できるだけ早く連絡がほしいそうです」

「わかった。すぐに戻るよ」

「あっ、缶は私が捨てておきます！」

「そう？ なら頼むよ、ありがとう。——じゃあな、三雲」

神宮寺は原田に缶を渡して足早に去っていく。その後ろ姿が見えなくなるなり、原田は乱暴な手つきで空き缶をゴミ箱に投げ捨てた。次いで瑠衣の方を見ると、不機嫌そう

に眉間に皺を寄せる。先ほどまでのご機嫌な様子はどこへやら、瑠衣を見る視線はとても鋭い。

「三雲さん。こんなところで仕事をさぼって、神宮寺さんと何を話してたんですか？」

問い詰めるような口調に、たまらずため息が漏れた。

原田が神宮寺を狙っているのは、社内でも周知の事実だ。今はまだ片思いの段階らしいが、ことあるごとに神宮寺にアピールしているのを瑠衣もよく目している。

そんな彼女にとって、瑠衣は目障りな存在らしい。

神宮寺の目を盗んでは、こうして絡んでくるのだ。

——そんなことをする暇があれば仕事をしてよ。

そんな本音をぐっと堪えて、瑠衣は原田に向き合い淡々と答えた。

「仕事の話をしていただけだよ。それに少し休憩してただけでさぼっていたわけじゃないわ」

「……本当ですか？」

「本当よ」

疑うような視線さえ煩わしくて、瑠衣は淡々と答える。指導するべき後輩にこんな感情を持つのは褒められたことではない。それはわかっているが、業務外のことでは一方的な嫉妬をぶつけられるなんてたまったものではない。

「ならいいですけど。私が神宮寺さんを好きなのは知ってますよね。邪魔だけはしないでくださいよ」

言うだけ言って気が済んだのか、原田はくりりと背中を向けて去っていく。彼女の子供っぽい牽制に、瑠衣は何も答えなかった。

学生の恋愛ではあるまいし、とても職場でするような話ではない。しかも当の本人は神宮寺に片思いしているだけで恋人ですらないのだ。反応するのも馬鹿らしい。

「はあ……」

疲れる。それが率直な感想だった。

自分が一部の女性社員から煙たがられている自覚はあった。

男女平等が謳われて久しいが、この会社の営業職はまだ男性社員の比率が高い。そんな中、女ながらに営業の最前線に立つ瑠衣の存在は、周囲から「お高くとまってる」ように見えるらしい。

勝気そうな外見や、常に化粧や髪、ネイルに気を抜かないところも面白くないと陰口を叩かれているのを聞いたこともある。加えて、人気者の神宮寺と気安い間柄というのがさらに女性社員の嫉妬を買っていた。

とはいえ、ほとんどの女性社員はそれを表立って口にしたりしないし、瑠衣も仕事に支障がない分には構わないと思っていた。

それ以外の社員とはほどよい関係が築けているし、信頼する同僚も上司もいる。

だが唯一の例外が原田理保なのだ。彼女は昨年、経理部から営業部に異動してきた。

営業事務の彼女は瑠衣の後輩という扱いで、仕事上でもよく関わる。それなのに神宮寺と話すたびに嘔みつかれていて、やりにくいことこの上ない。

（会社は学校じゃないのよ。惚れた腫れたはよそでやってよ）

本人の前で言ったことはないものの、何度そう口に出かかったことか。

営業事務としての原田は決して無能ではない。瑠衣と違って愛嬌のあるところは彼女の長所だと思うし、細やかで丁寧な仕事をすることも評価できる。感情が表に出やすいところはどうかと思うものの、基本的に彼女は優秀なのだ。

瑠衣に対する態度は褒められたものではないが、頼んだ仕事はきちんとこなしてくれていた。

だがひとたび神宮寺が絡むと、それらが帳消しになるくらい面倒になるのだ。

——好きだから。

ただ、それだけの理由で。

だがあいにく、瑠衣にはその感情が理解できなかった。

最初の失恋から約十年。その間、それなりに恋愛はしてきたつもりだ。しかし、その中で瑠衣の中に生まれた恋愛観は、愛とか恋とかめんどくさい、というなんとも冷めた

ものだった。

高校の時に初めてできた彼氏との恋は、卒業式の日、相手の浮気という形で桜以上に見事に散った。浮気相手は年上のOL。今の自分なら「男子高校生に手を出すようなOLはろくでもないからやめておけ」くらい言えるが、当時は初心な女子高生。傷ついて終わってしまった。

次に付き合ったのは大学生の時で、同じサークルの先輩だった。

最初の彼氏に『可愛げがない』と言われた苦い経験から、先輩には素直に甘えてみた。すると今度は『思っていたのと違う。もつと大人っぽいと思っていた』と振られてしまった。ならばと次にできた彼氏には、極力甘えず冷静に接したところ、またもや『もつと甘えてほしかった』と言われる始末。

甘えてもだめ。クールでもだめ。

(じゃあどうしろって言うのよ……)

勝手に期待して、勝手に落胆して、自分の理想を一方的に押し付けられても困る。結果、瑠衣は決めた。

男に振り回されず、他人に何を言われてもぶれない。自立した人間になろう、と。

その後、社会人になってからも異性から声をかけられることはしばしばあった。

その中で気が合いそうな人と付き合ってみることもあれば、熱心なアプローチに根負

けて交際に至ったこともある。だが、誰に対しても瑠衣は本気になれなかった。

もちろん、人から好意を向けられるのは素直に嬉しい。でも、相手に「好きだ」と言われれば、自分も同じだけの気持ちを返さなければならぬ。恋人という関係は一方の好意だけでは成り立たないのだから当然だ。瑠衣にはそれが難しかった。

経緯はどうであれ付き合うと決めた時点で、相手に対してそれなりの好意はある。

しかし、相手の男性が自分に向けるほどの情熱を、瑠衣はどうしても持つことができなかった。

『いつか自分のことを好きになってくれれば、今はそれでいい』

初めはそう言っていた相手も、最後には『自分ばかりが好きでいるのに疲れた』と言って去っていく。そんなことを繰り返すうちに、いつしか瑠衣は恋愛すること自体を諦めた。相手に対して申し訳なくなるのも、好意の見返りを求められることにも疲れてしまったのだ。

恋愛をするたびに心をすり減らすくらいなら、初めからしなければいい。

ひとたびそう割り切ると、自分でも拍子抜けするくらい気持ち楽になった。

そうして恋愛から遠ざかること数年。気づけば二十九歳になっていた。

現在は独身生活を謳歌中だ。

アラサーという言葉を気にしていた時期もあった。しかし三十路まで残り一年を切っ

た今となつては、そんなものはただの記号だと思つている。

二十代から三十代になつても、きつと自分の日常は変わらない。

毎日くたくたになるまで働いて、休みの日は趣味や美容など好きなことをして過ごす。稼いだお金は全て自分のために使つて、そのためにまた稼いでを繰り返すのだ。

そうした時間を過ごすうちに、いつの間にか三十代、四十代を迎えているのだろう。漠然と描いた青写真の中で、瑠衣は一人だ。恋人なんてもう何年もいないし、この先できる予定もない。そんな毎日を不満に思つたことはないし、むしろ生活は充実していると思つた。

……それでもふとした時、とても寂しくなる瞬間がある。

たとえば、友人に恋人ができた時。あるいは結婚した時。

もしくは、同世代の女性に子供が生まれた時。

愛する恋人、伴侶、あるいは家族を手にした女性はとても綺麗だと思つた。

顔やスタイルのように上辺の美しさとは違う、体の内側から滲み出る美しさだ。そしてそれは、自分が決して持ち得ないものでもある。

自ら恋愛を遠ざけておいて、羨ましがらるなんて都合のいい話だと思つた。

さりとて瑠衣も一人の女だ。人肌が恋しくなる時もあるし、人並みに性欲もある。

自分のことだけを考えるなら、相手の気持ちなんて無視して「恋人」の立場を利用す

ればいい。けれど瑠衣は、相手を利用する度胸もずるさも持てなかった。

相手も自分も傷つかず、それでいて寂しさも解消できる方法はないか。

思いついたのは、セフレを作ることだったが、これはすぐに諦めた。

——互いに本気にならずに割り切った付き合いができる存在。

そんな都合のいい相手、いるわけがないのだから。

2

十月初旬。

山田商事の担当を外されてから一ヶ月経つた金曜日の夜。

仕事終わりの瑠衣は、行きつけの居酒屋にいた。

いつもは一人でふらりと訪れてカウンター席で静かに飲んでいるのだが、今日は違った。

瑠衣が座つたのは四人がけのテーブル席。暖簾を下げれば半個室になるそこは、複数人で落ち着いて飲むにはぴったりの席だ。そんな中、瑠衣の向かい側には、今日も今日とて憎らしいほど顔の整った男が座っている。その表情がいつもの二割増しで輝いてい

るのは見間違いでないだろう。

「それじゃ、乾杯するか」

運ばれてきたビールジョッキを片手に神宮寺はニヤリと笑う。対してカシスオレレンジの入ったグラスを持った瑠衣は、むっと顔をしかめた。

「ちなみに何に対して乾杯するの？」

「それはもちろん、上半期最優秀営業成績を記録した俺のために」

神宮寺はにっこりと満面の笑みを浮かべる。まさか断らないよな、と言外に細められた眼差しに、瑠衣は仕方なく「乾杯」とグラスを合わせた。

「そうふてくされた顔をするなよ。お前だって全国十六位だろ？ 十分すごいよ」

「全国一位の人に言われてもね」

「まあたそういう可愛くないこと言って。いいじゃん、俺はむしろお前が羨ましいよ」

「一位が十六位の何が羨ましいのよ」

「ん？ 伸び代があるところ？」

「……」応聞いておくけど、それって嫌味？ それとも慰め？」

「どっちだと思う？」

「前者」

「正解！」

「……あんたって本当にいい性格してるわよね」

「だろ？ 俺もそう思う。三雲に褒められるのは嬉しいな」

「別に褒めてないんだけど」

「照れんなって」

何を言っても暖簾に腕押し、糠ぬかに釘くぎ。相手にするだけ無駄だと瑠衣はため息をつく。

（ああもう、悔しい）

つい先日、上半期の個人営業成績が発表された。全国各支社の営業職が評価対象で、上位三十名が十一月に行われる表彰式で優秀成績者として表彰される。

前回十八位だった瑠衣は、今回は十六位。十分立派な成績だと思うが、十位以内を目指していただけに悔しい気持ちはあった。下半期こそはと思うものの、大口取引先の山田商事の担当から外された以上、次回は表彰対象の三十位に入るのすら難しいかもしれない。

対して目の前のいけすかない男は堂々の全国一位。

これが他の人なら素直に祝えただろうに、神宮寺だと悔しさしか浮かばない。しかし悲しいかな、その悔しさを発散する相手も神宮寺しかないのだった。

東京支社で表彰されたのは、瑠衣と神宮寺の二人だけ。それなのに「神宮寺に負けて悔しい」なんて他の社員に愚痴を言ったら、それこそ何を言われるかわからない。

結局瑠衣は、からかわれるのを覚悟して祝勝会——ただし神宮寺の——をしている。
 (どこまで完璧なのよ、この男は)

瑠衣はグラスの縁に口をつけてゆっくりと飲む。その間にも神宮寺はジョッキを傾けてあっという間にビールを飲み干し、次を注文していた。相変わずいい飲みっぷりだ。目の前の綺麗な顔立ちには、ビールよりもむしろワインやシャンパンの方が似合いそうなのに、この男が好んで飲むのもっぱらビールや日本酒、焼酎などだ。一部の女性社員からはそのギャップがたまらないと評判らしいが、あいにく瑠衣は全く興味がない。「三雲は今日もカシオレか」

「欲しいの？ あげないわよ」

そう言うと、即座に「そんな甘いもんいらねえよ」と苦笑混じりに返ってくる。

「そうじゃなくて。お前が頼むのって、いつも甘い酒ばっかだと思って」

「しょうがないでしょ？ お酒は好きだけど、体質的にすぐ酔っ払っちゃうんだもの」
 自分が酒に弱いと知ったのは二十歳の時。大学のゼミの飲み会で、気になる酒を片っ端から飲んだ瑠衣は、見事に潰れてしまった。それ以降、瑠衣は自分にあるルールを課した。

人目のある場所で飲む際は、アルコール度数の低いものを三杯まで。

このルールのおかげで、社会人になってから酒の席で失敗したことは一度もない。度

数の高い酒を飲んでみたいとは思うものの、醜態を晒すくらいなら我慢した方がいい。

「意外だよな。いかにも酒に強そうな見た目のくせに、女子っぽい酒しか飲まないんだから。最初は狙ってやってるのかと思った」

「別に狙ってないわよ。それに私がお酒でか弱いアピールをしたってしょうがないもの」
 ああいうのは、可愛らしい女性がいるから効果があるのであって、見た目も中身もキツイ自分がやったところで意味がないのだ。だが意外にも神宮寺はそれを否定した。

「そんなことないだろ。むしろ、三雲みたいなのがやるから意味があるんじゃないのか？
 なんつーの、ギャップ萌えてやつ？」

「萌えて、親父臭いわよ」

「うっせ！——まあ、俺は三雲のそういうところ、素直にすごいと思うよ」

「そういうところって？」

「三雲の外見ならいくらでも女を武器にできるだろ？ でも、お前はそうしない。むしろ俺や他の営業に負けてたまるかって泥臭く働いてる。そういうところ、尊敬する」

——まさかそんなことを言われるなんて。

かあつと顔が熱くなる。

瑠衣にとつての神宮寺は、いけすかない男であると同時に目標でもある。けれど神宮寺は瑠衣のことなど眼中にないと思っていた。

何かと軽口を叩いたりからかってきたりするのは、身のほど知らずにも神宮寺をライバル視する瑠衣を物珍しく思っているからだ、と。

そんな相手に「尊敬する」と言われて、嬉しくないわけがなかった。でも、それを素直に伝えられない瑠衣にできたのは、顔を赤くしてはくはくと口を動かすことだけだった。もちろんそれを見逃す神宮寺ではない。

「なんだよ、急に黙り込んで。もしかして照れてんの?」

悪戯いたづらっぽく唇の端を上げる男に、瑠衣は「まさか!」と慌てて否定する。

「神宮寺が急に変なことを言うから、驚いただけで……」

「声が震えてる。顔も真っ赤だ!」

「からかわないで! 酔っ払い!」

「いや、全然酔ってねえから!」

「私が酔ってるって言ったら酔ってるの!」

「無茶苦茶理論すぎんだろ、どこの暴君だよ!」

「うるさい。……もう!」

なんだらう。理由はわからないがとてつもなく恥ずかしい。

動揺を鎮めるために、瑠衣は目の前の酒の入ったグラスを手を取った。水で冷えた液体が喉を通る感覚が気持ちよくて、半分ほど残っていたカシスオレンジを一気に飲み干

す。空からになつたグラスを卓に置くと、呆気にとられたようにあんぐりと口を開ける神宮寺と目が合った。

「お前、酒に弱いんだろ? 一気飲みなんてして大丈夫かよ!」

「一杯目だから大丈夫。それより神宮寺が今飲んでるのって、梅酒?」

「ああ。梅酒のロック!」

話題を逸らす目的半分、興味半分で聞くと、神宮寺は領いてグラスを掲げる。かか
グラスに半分ほど注がれた液体は琥珀色で、なんとも美しい。

「……綺麗ね。ロックってことは度数が高いのよね?」

「少なくともカシオレよりは強いな。俺のでよければ少しだけ飲んでみるか?」

「いいの?」

「三雲が気にならないなら、俺は別に!」

あいにく間接キスで騒ぐほど純粹でもなければ若くもない。彼の言葉に甘えて一口飲んでみれば、想像していたよりずっと飲みやすかった。

「……美味しい!」

「気に入ったなら頼めよ。一杯くらいなら大丈夫だろ。飲みきれなかったら俺が飲んでやるから!」

「じゃあ、そうしようかな!」

度数が高い分、今日は次の一杯でやめておけば問題ないだろう。瑠衣が頷くと神宮寺はさっと店員を呼んでオーダーする。瑠衣相手にもレディーファーストを徹底するなんて、相愛わず隙のない男だ。ほどなく届いた酒はやはり美味しくて、とても飲みやすい。「今まで水割りかソーダ割りしか飲んだことなかったけど、ロックもいいわね」

「気に入ったなら気にせず飲めよ。もし酔っ払ってもちゃんと介抱してやるから安心しろ」

「神宮寺が私を介抱するの？」

「なんだよ、送り狼になるとも言いたいのか？」

「まさか」

おどけるように肩をすくめる男の言葉を瑠衣は一蹴する。

「私に興味なんてなくせに、そんなことになるわけないでしょ」

「……………」

てつきりすぐに同意されると思ったのに、意外にも神宮寺は何も言わなかった。それどころか、何が気に入らなかったのか、眉間に皺を寄せて睨むような視線を向けてくる。「な、何よ」

冗談で冗談で返して何がいけないのか。

神宮寺が瑠衣を異性と思っていないのは、身をもって知っている。普段の態度を見て

いればそれは明らかだ。軽口を叩き合う程度には親しいが、二人の間に甘い空気が流れたことは一度もない。だからこそ瑠衣もこうして気がねなくサシ飲みができる。

この関係が瑠衣にとってはちようどいいのに、神宮寺は違うのだろうか。

「言いたいことがあるならばつきり言って」

「別に。なんでもねえよ」

「どう見てもなんでもないって顔じゃないでしょうが」

あいにく、気になったことはとことん追及するたちだ。

相手がライバル視している男ならなおさらだ。しかし、神宮寺は「本当になんでもねえよ」と面倒くさそうに手をひらひら振って話を終わらせようとする。

「相愛わず鈍い奴だと思っただけだよ」

「なあに昔からの知り合いみたいなこと言ってるのよ。それに私、別に鈍くないから」

「はいはい、それでいいよ」

これでこの話は終わりだとも言うように神宮寺は肩をすくめる。なんとなく話を逸らされた気分になりながら、瑠衣はグラスの縁に口をつけた。

(やっぱり、美味しい)

神宮寺に勧められて注文した梅酒は、割って飲むよりずっと強く梅の味を感じる。梅とアルコールの混じった芳醇な香りもまた心地よくて、瑠衣のグラスはあつという間に

空になっていた。

(また注文しようかな)

今日はこれで終わりにしようと思っていたが、思いの外飲みやすいし、もう一杯くらいなら飲んでも大丈夫な気がする。悩む瑠衣の前で、神宮寺はブランデーを注文する。

「ねえ、それで何杯目？ もうかなり飲んでるわよね、大丈夫なの？」

「問題ない。俺、ザルだから」

酒の席で失敗したことはないと言する男に少しだけ嫉妬する。

酒が好きなのに体質のせいで自由に飲めない瑠衣とは正反対だ。

見た目も仕事ぶりも完璧な上、人たらしで自然と周囲を笑顔にしてしまう。

「ほんと、嫌味な男よね」

妬み半分、おふざけ半分で呟いた声は神宮寺には届かなかつたらしい。

「何か言ったか？」

目を瞬かせる彼に「なんでもない」と首を横に振ると、瑠衣はその手元に視線を向けた。先ほどの梅酒も美味しかったし、彼の選んだ酒に興味がある。ブランデーは梅酒以上に度数が高いのは知っているが、もしかしたら意外と飲めたりしないだろうか。

「それが気になっただけ。ねえ、味見してみてもいい？」

「いいけど……その前に一つ聞いていいか」

「何？」

「お前、会社の他の奴と飲みに行った時もそうなのか？」

俗に言う「一口ちょうだい」をやっているのか、と聞いているのだろう。瑠衣はすぐに「まさか」と否定する。

「普段は人の物を欲しがったりしないわ。こんなこと頼むのは相手が神宮寺だからよ」

友人相手にもめつたにしない。すると神宮寺は、啞然としたように目を大きく見開く。

「は……？」

その表情を不思議に思いつつも、瑠衣は彼のグラスを取る。そして梅酒と同じ感覚で一口飲み——すぐに後悔した。

喉が焼けるように熱い。かあっと一気に顔が火照るのを感じた。生まれて初めて感じる強烈なアルコールに、瑠衣は慌ててグラスを卓に置く。同時に唇の端に残っていた液体がつうつと肌を伝うのがわかって、慌ててそれをべろりと舐めた。

ちろりと覗いた舌を見て、神宮寺が息を呑む。

「おまつ……！」

「え、何？」

「今のは……ああもう！ なんでもねえよ、ほらもう返せ！」

固まっていた神宮寺は、我に返ったように瑠衣の前からグラスを奪い取る。その素早

さに呆氣に取られる瑠衣に彼は言った。

「三雲にブランデーは十年早い」

「み、みたいね?」

あまりの勢いに素直に同意する。神宮寺は苛立った様子でグラスを呷ると、深く大きなため息をついた。

「……頭痛え」

「だからさっき『大丈夫?』って聞いたのに」

「酒のせいじゃないっての」

よくわからないが、今はこれ以上刺激しない方がよさそうだ。常日頃から余裕な態度を崩さない男だが、密かにストレスを溜めていたのかもしれない。トップにはトップなりの苦労があるんだな、と同情しつつ水を飲む。そんな瑠衣を、神宮寺が胡乱げに見つめてきた。

「今、何か変なこと考えただろ」

「まさか。神宮寺も人知れず苦労してるのねって思っただけよ」

「……誰が原因だと思っただよ、ったく」

「まるで瑠衣のせいだとも言いたげな物言いだが、聞こえないふりをした。」

「今日はもう酒は終わりにしておけ。じゃないと俺の心臓がもたないから」

それがどう関係しているのか、さっぱりわからない。先ほどはザルと言っていたが、案外もう酔っているのかもしれない。そんなことを思いながら、瑠衣はきっぱり「嫌よ」と答えた。

「あと一杯飲んだら終わりにするわ」

「お前な……。いいか、俺は忠告したからな」

「はいはい。もう、神宮寺、ちよつとうるさい」

面倒くさそうに言うのと、諦めたように「もう知らねえ」と嘆息されたのだった。

その後も二人だけの飲み会は続いた。

軽口を叩きながら神宮寺と過ごす時間が瑠衣は決して嫌いではない。もちろん二人の間に色っぽい雰囲気は皆無で、会話のほとんどが仕事についてだ。さすがはエリート社員、しかも話題が豊富で話し上手とくれば楽しくないはずがなかった。

神宮寺と一緒にいるのは、楽だ。

調子がよくて何かとからかってくる性格はムカつくが、それでもこうして仕事について語り合う時間はとても充実していて居心地がいい。

改めてそれを自覚した瑠衣の脳裏に、ふとあることが思い浮かぶ。

『互いに本気にならずに割り切った付き合いができる存在』

神宮寺は、瑠衣が思い描くセフレの条件にびたりと合致^{がっち}していた。

「——いや、ないわ」

即座に否定する。

仮に瑠衣がそれを望んだとしても、神宮寺に一蹴されて終わりだろう。

「どうした、急に黙り込んで」

物思いに耽^{ふけ}っていたからか、それともいつも以上に酔っていたからか。瑠衣は考えるより先に口を開いていた。

「え？ ああ、セフレが欲しいと思って」

「ぶはっ……！ は……セフレ……？」

突然むせ始めた神宮寺の反応にはっと我に返るが、もう遅い。反射的に答えた言葉を彼ははっきり聞き取っていた。もしも素面^{しよふ}であったなら、なんとしてでもごまかしていただろう。

けれど酔いの回った頭では無理だった。

「……別にいいか」

セフレを望んでいることだけなら、話しても問題ないだろう。それを知ったところで周囲に吹聴^{ふいろう}するような男ではないはずだ。

そう思ってしまいうくらいには、自分は酔っていたのだと思う。

それは神宮寺の目にも明らかだったらしい。しばらく咳き込んでいた神宮寺は、なんとか呼吸を整えると改めて瑠衣を見やる。その顔には驚愕^{きょうがく}の色が浮かんでいた。

「……酔いすぎじゃね？」

「神宮寺にこんなこと話すんだから、そうかもしれないわね」

素直に肯定すると、神宮寺はますます困惑したように眉根を寄せる。

「発言がぶつ飛びすぎてどこから突っ込んでいいのか……。というか、俺はてっきり三雲は男嫌いなのかと思ってた。だから誰とも付き合わないのかと……」

「まさか。男嫌いならこうして二人で飲みに来たりしないわよ」

「……相手が俺だから平気なだけじゃなくて？」

「神宮寺の目に私がどう見えてるかわからないけど、私はどこにでもいるただの独身女よ。性欲だつてあるし、ふとした瞬間に寂しくなることもあるわ」

神宮寺は息を呑んだ。その姿を見て改めて自身の酔いを自覚する。

目の前にいる男は、普段の自分なら絶対に弱みを見せたくない相手だ。そんな男相手にこころも内心を曝^{さら}け出しているのだから。

「それならどうして彼氏じゃなくてセフレなんだ？」

至極^{しごく}真つ当な質問。それに対する答えは決まっていた。

「恋人関係になったら必然的に見返りが発生するでしょ？ それが嫌なの。どうしたっ

て私は、相手と同じだけの気持ちを返せない。それなら、初めから恋愛感情がない割り切った関係の方がいい」

勝手に理想を抱かれ、失望されるのもうごりごりだ。

「……それは経験談？ 忘れられない男がいるとか？」

神宮寺は言葉を選びながらも質問を重ねる。まさか神宮寺が興味を示すとは思わなかった。それに驚きながらも、瑠衣は否定の意味を込めて首を横に振る。

「そんな立派な理由じゃないわ。ただ、恋愛に対して興味が持てないだけ。冷めてるのよ」

「だからセフレが欲しい、と」

「そういうこと」

神宮寺はどこか疲れたようにため息をつく。

「……驚きすぎて、正直何を言ったらいいのかわからない」

「神宮寺とこういう話をするのは初めてだものね。いつもは仕事のことばかりだし」

「俺は、三雲がそういう話を望んでないと思ってたからな。プライベートについてはずか聞かれるのは嫌いだろ？ 特に恋愛については」

さらりと言われた言葉は、正解だった。

「……意外。私のことよく見てるのね」

「意外じゃねえよ。俺は、お前のことをずっと見てた」

「え……？」

それはどういう意味——喉元まで出かけたその問いは、瑠衣を見据える神宮寺の視線にかき消された。痛いほどの強い眼差しが、瑠衣を射抜く。

「セフレが欲しいなら俺にしておけよ」

「何、馬鹿なことを言ってる……わかかった、やっぱり神宮寺も酔ってるんでしょ？ そうじゃなきゃあんたがそんなこと言うわけないもの」

「茶化すな、俺は本気だ」

「っ……………」

ひゅつと喉の奥が鳴る。ドクン、ドクンと心臓が一気に鼓動を速めて、体中に血液を送り出しているのを感じる。

「俺じゃだめな理由でもあるのか？」

「そういうわけじゃ……」

「ならいいだろ」

話は決まりだとはかりに言い切る彼の姿に、瑠衣は混乱する。一瞬、神宮寺がセフレだったらと想像したのは事実だが、本当に実現すると思ったわけではない。

意味がわからない。それでも一つだけわかるのは、このまま流されてはいけないということだった。何か——何か、言わなければ。そう思って浮かんだのは、彼に彼女がい

るといふ噂だった。

「だめよ」

「どうして？」

「恋人がいる人とセフレになるなんてありえない。私がこの世で一番許せないのは浮気なの」

高校生の頃、瑠衣は彼氏に浮気されて振られた。今さら川瀬に未練なんて一ミクロンも存在しないが、あれ以来自分の中で浮気と不倫だけはありえない。

浮気は絶対悪。それは唯一揺るがない瑠衣の恋愛観だ。

だがそれに対して神宮寺は「恋人なんていない」と明言する。

「どこで聞いた噂か知らないけど、そもそも恋人がいたら他の女とサシ飲みしたりしねえよ」

「じゃあ、恋人を取っ替え引っ替えしてるっていうのは……？」

「それも嘘。俺がそうしているのを三雲は見たことあるのか？」

「ないけど……」

「なら、それが答えだろ。派手に遊んでそうとか、陰で色々言われてるのは知ってる。あえて否定しなかったのは、それで何か害があるわけじゃなかったからだ。でも、お前にそう思われるのだけは放っておけない」

(どうして……)

なぜ、瑠衣だけは例外なのか。聞きたいのに、聞けない。

声を発することができないほど、神宮寺の眼差しや声色が熱すぎたから。

「三雲」

「あ……」

「お前が割り切った関係を望むなら、俺はそれでも構わない」

だから、と、神宮寺は言った。

「俺を選べよ」

「っ……………」

顔が熱い。ドクンドクンと耳元で鼓動が聞こえると錯覚するほど、心臓が痛いくらいに高鳴っているのがわかる。

(知らない)

こんな神宮寺、私は知らない。

二人きりで飲みに行こうと、気軽に軽口を叩き合おうと、今日までの彼は瑠衣にとつてただの同僚にすぎなかった。でも今は違う。直視するのがためらわれるほどに、目の前に座る彼はどうしようもなく「男」だ。

「それで、答えは？」

艶めいた声で問われた瑠衣は、咄嗟に席を立とうとする。

「待てよ」

「あっ……!!」

だがそれより早く対面から伸びた手に腕を掴まれる。

「返事、聞かせろ」

手首は軽く掴まれただけで、振り払おうと思えばすぐに解けた。しかし、なぜかそれができない。自分を見つめるまっすぐな瞳に囚われてしまう。

「返事って、急に言われても……」

決められない、と消え入りそうな声で答えれば、神宮寺は「それもそうか」と小さく頷く。しかし、ほっとしたのは一瞬で、彼は瑠衣の手を掴んだまま続けた。

「相性を確かめる前に決めるわけにはいかないもんな」

「相性って、まさか——」

セフレから連想される答えは一つしかない。

「体に決まってるだろ?」

神宮寺は艶やかに笑んだ。

その後、二人がタクシーで向かったのは居酒屋からほど近いビジネスホテル。

こういったシチュエーションは初めてではないのか、神宮寺は慣れた様子でホテルの空気を確認し、チェックインの手続きをする。その間も彼はしつかり瑠衣と手を繋いでいた。

指を絡めたそれは恋人繋ぎで、神宮寺の「逃がさない」という意思を伝えてくるようだ。

彼の手は、客室に向かうエレベーターに乗った後も離れることはなかった。

神宮寺と手を繋いだのはこれが初めてだ。それなのに、二人してホテルにいる。

自分で決めたことなのに、この状況は酷く現実味がない。心臓は今にも破裂しそうなくらいに激しく騒いでいる。それが酔いのせいだけではないのは明らかだった。

そんな瑠衣とは対照的に、神宮寺は至って冷静な態度で無言を貫いている。だがその視線は瑠衣に注がれたままだ。熱を宿した強い視線に心臓の音はいつそう大きくなり、胸が痛いほどだった。

「何か言っよ」

沈黙に耐えきれずに小さくこぼす。

「……私だけが緊張してるみたい」

拗ねるような声に神宮寺が目を見張ると、エレベーターが目的の階に到着したのは同時だった。神宮寺は瑠衣の手を引いて客室に向かうと、カードキーをかざしてロックを解除する。そうして共に部屋の中へ入った、次の瞬間。

「んっ……!」

神宮寺は瑠衣の背中をドアに押し付け、有無を言わさず唇を重ねてきた。

「待つ、神宮——あ、ん……!」

制止の言葉は、ぬるりと口内に滑り込んできた舌によって封じられてしまう。

あまりに唐突なキス。瑠衣は反射的に舌を引つ込めようとするが、容易く絡め取られる。なんとか身を振ろうとしても、腰に回された手がそれを阻む。さらにはもう片方の手で後頭部を支えられて、瑠衣にできたのは、口の中を蹂躪してくる舌を受け入れることだけだった。

「俺だって緊張してるよ」

「な、に……?」

「こんな風がつつくくらい、余裕がない」

「ふあ、っ……!」

熱い舌が歯列をなぞり、舌裏をべろりと舐められる。かと思えば唇をやんわりと食まれて、吸われて——

唇が触れ合うだけのキスではない。貪り尽くすような口付けだった。

（なんで、こんな——）

激しすぎるキスに翻弄されながらうつすら瞼を開けた瑠衣は——驚いた。

立ち読みサンプル はここまで

神宮寺はまっすぐ瑠衣を見下ろしていたのだ。その眼差しの強さに目を奪われていると、腰に添えられていた手でつつと背中を撫でられた。

「あっ……!」

甘い痺れが背筋を駆け抜ける。体から力が抜けてその場に座り込みそうになる瑠衣を、すかさず神宮寺が抱き留めた。次いで感じたのは浮遊感。気づけば瑠衣は彼に横抱きにされていた。

突然のお姫様抱っこにぎよっとする。彼は危なげない足取りでベッドに向かうと、瑠衣の体をそつとそこに横たえた。そのまま瑠衣の額にちゅつと触れるだけのキスをして、離れていく。

「シャワーを浴びてくる。逃げるなら今のうちだ」

「え……?」

「考え直すならこれが最後のチャンスだ。戻ってきたら、その時はもう遠慮しない。——覚悟しておけよ」

神宮寺はニヤリと笑い、バスルームへ消えていった。

その後ろ姿が見えなくなるなり、瑠衣は枕に顔を埋めて大きく息を吐く。

「何よ、あれ……!」

貫くような熱い眼差しも、余裕がない様子で夢中でキスする姿も、全てが初めて見る